

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	鏡の間
Author(s)	児童の言語生態研究会,
Citation	児童の言語生態研究 , 4 : 67 - 69
Issue Date	1970-12-15
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045051">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045051</a>
Right	
Relation	



# 鏡の間

毎号、児童の注目すべき文章を掲載して来たが、本号は「書く」ということの特集ということで、それと関連ある資料であろうと心がけた。

編集部依頼により、東京都港区立港南小学校六年二組（二十三名）、横浜市立芹が谷小学校六年四組（三十九名）に次のような作文を書いてもらった。

「うれしさ、たのしみ、どちらかの題で作文しなさい。」

二・三日後、再び、

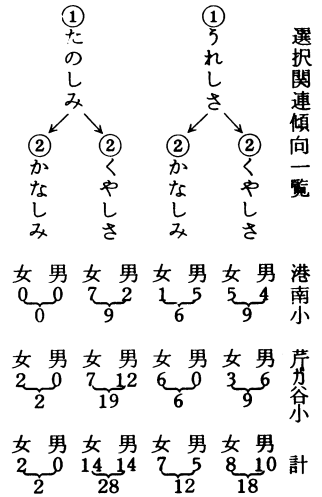
「くやしき、かなしみ、どちらかの題で作文しなさい。」

その結果の特徴を示すと

題目選択一覧

港南小		男	女	芹が谷小	男	女	計
うれしさ		6	9	9		6	男15 女15 30
たのしみ		12	9	2		7	男14 女16 30
くやしき		6	12	18		10	男24 女22 46
かなしみ		5	1	0		8	男5 女9 14

選択関連傾向一覧



作文例

註 発想・素材のとり方が動かないことを注意したい。  
①たのしみ②くやしき

先生のたのしみ

六年

HA男

先生のたのしみは、国語の作文の時間だ。いつも、ひねくれた問題をだして、みんなをこまらせている。「やさしい心をテーマに物語を書きなさい。」とか、「うれしいをテーマに作文を書きなさい。うれしいということばをつかうな。」と、いうことをいつてみんなをこまらせている。六年でかいた作文は、ぼくが、今までに書かされた物と全然ちがう。こんな、ひねくれた問題をだすのも、先生の一つのたのしみなのかもしれない。

ぼくのくやしき

六年

HA男

「あーあ、また、作文の時間だ。」  
時間がごくごくすぎる。一人また一人とできていく人たちが先生に見せにいく。

「うーん。」

まだ、ぼくは、材料がみつからない。どんどんできる人は、かいている。

「ちきしょう。」

もう、ぼくのむねの中は、書けないくやしきで、いっぱいだ。

「うーん。」

まだ材料がみつからない。

「そうだ、これにしよう。」

と、思った時は、もう時間がない。

「あー、あともうすこしだったのに。」

さっきのかけないくやしきではない、作文用紙にかきたい気もちでいっぱいだ。

「もうすこし時間があればなあー。」

と、紙にかけないくやしきがでてる。(芹が谷小)

たのしみ

IY女

心の中で、だれかが、おどっている、うれしそうに、足が、中に、ういている。

はねが、はえて、今にも、とぶように、心の中に、

あかりがついた、明るい、目がくらみそう、ダイヤモンドの、光りかもしれない。

どこかに、心が、飛んでいく、いいことがまっついているところ。

心が、明るいとても、明るい、わたしも、おどきそう、歌いそう。心の中は、うれしきで、いっぱい、今にもやぶれそう、でもこのうれしさは、ほんの一しゅん、それほど、自分が、思っていたことなのに、実際は、全々ちがう。

くやしき

I Y 女

心が、とても、あつい、ガソリンを、かけて、燃しているみたいだ。

心が、燃えている、思わず、水をまく、心の中の、火事は、いつまで、たっても、やまない。

手が、思わず、力を、入れて、ふるえる、にくしみが、上のほうへと、いく。

火は、水に、よって、ますます、大きくなり、ほのおが、上へ、上へといく。

口から、いかりの、ことばがでる。心の中を、火事にした人に、おかえしを、してやりたい。

そんな、気もちが、どこからか、おこってくる。

ほのおが、だれかに、よって、けされていく、下へ下へと下がって、いくが、にくしみは、きえない。

(港南小)

ドイリー

六年 k Y 女

一針かけて、引きぬいて、一針かけて、引きぬいて……。

毎日、ひまな時に少しずつレース編みをする。円形のドイリーが、ちょっぴり、ちょっぴり、大きくなっていく。初めは、小さな、小さな輪にすぎなかったけど、今はもう、直径二十三センチくらい……。

くさり編み、長編み、引っかけて、ぬいて、引っかけてぬいて……。あと何日で仕上がるかしら。

でき上がったら、花びんの下に、しこうかな。はやくできないかしら。

とても、楽しみ。

ピアノとテレビ

六年 k Y 女

時計は、六時を少し過ぎていました。あたりは、もうすず暗くなっています。私はテレビのスイッチを入れ、その前にデーンと腰をおろしました。おもしろい、とてもおもしろい……。五分位たったでしょうか。キンコーン、だれでしょう。言うまでもなく、ピアノの先生。人の気も知らないで、どうしてこんな時間に来るの？ 私は、思わず先生を、にらみました。そんな事とも知らず、先生は、練習を開始しようとしています。私は練習どころじゃありません。テレビが、気になって……。失敗ばかり。先生が注意しても、全ぜんこえないのです。何分位たったでしょうか。やっと練習が終わりました。すぐテレビにかけつけたけれど、すでに終ってから、五分過ぎていました。画面では、ニュースのアナウンサーが、一生懸命しゃべっています。私はアナウンサーまでが、にくらしく見えてきました。テレビをけつとばしたくなっちゃった。(芹が谷小)

①うれしさ②くやしき

ブレセント

M H 男

あかちゃんが、生まれたので、その、おいわいに、行きました。とちゅうで、おいわいのふくをかいました。ぼくは、いやいやながらついていきました。やっと、かって、行こうとしたら、おとうさんが、「もうすぐおまえのたんじょう日だから、すきなものを、えらんできなさい。」と、いいました。ぼくは、おもちゃうりばへ、すつとんでいき、さがしたあげく「光線じゅうが、いい、これで、いいでしょ。」と、たのん

だら、おとうさんが「ちょっとこっちへこい。」と、いいました。ぼくは、光線じゅうに、きめていたので、ちよつとだけ見るつもりで、いきました。そこには、ちいさい子がのる、おもちゃの自動車が、あったので、あんだというおうとしましたが、おとうさんのゆびさしているものが、自転車、だったので、光線じゅうなんてわすれて、「これが、いい。」と、思わずいってしまいました。

将棋

M H 男

日曜日の朝、おとうさんが、起きるころ、ぼくは、いそいで洋服にきがえて、下において行きました。今日は、将棋が、やれるからです。将棋を、ならべて、おとうさんの、起きて来るのを、待ちました。なかなか、起きてこないのので、「階へ、行って、本を、読んでいました。」

すこしすると、「おうい、いきよくやらないか。」という、おとうさんの、声がしたので、うれしくて、すぐに行き、さっそく始めました。一回目おとうさんが、勝ちました。二回目また、負けてしまいました。三回目ぎりぎりのところで、ぼくが、勝ちました。けれども、四回、五回、六回、七回と、続けて、負けてしまいました。ぼくは、ちくしょうと思って「もう一回だけやって。」と、たのみました。おとうさんは笑いながら、一回やってくれましたが、負けてしまった。(芹が谷小)

うれしさ

六の二

K K 男

心の中に小さくなってぼつんとあり、また、大きく

もそんざいしている。いつもは、小さくちりのようにうごめいている。だがいざ(えき)をあたえるとむくむくふくれだして、心の中のものをみんなおおいかぶさってしまいいなにかもをわすれさせてうちよう点にさせてしまう。そしていろいろな、さいなんをおこすこともしばしばある。このわたがしのようなのはよくほうとふんわかムードのかたまりにすぎなく、その力は、いじ悪るな、い大なものといえよう。

く や し さ

六の二

KK男

心の中にもじりイライラとよつきるふまんそうに  
いる。一本のゴム糸につながれている。そしていつも  
外にでようとあばれまわっている。そして門の所まで  
は、きてゴム糸にひっぱられてしまい、イライラして  
いる。それなのにいざおこしたらさーたいへん、ド  
カーンと一発きたと思ったらゴム糸だろとかなんだろ  
うがぶっこわして外に出て大あばれ。そのあばれかた  
は、ものごとに見さかえなしにぶつかったりそして気  
がしずまるとおとなしく心の中にはいついてしま  
う。するとまたゴム糸につながれてしまうとまたイ  
ライラはじめるこのいったんおこるとどうしようもな  
いばくだんみたいな物は、ひじょうにきけん力をたく  
わえている。

(港南小)

、運動会での事

六年四組

JA女

わたしの待ちに待った日が、今年も来ようとしてい  
る。去年、わたしは、この日を不安に入っている気持  
ちで、待った。その不安は、適中した。徒競争で、び

りだった。でも、運動会は、勝つことだけではない。  
と自分に言いかけた。そして、じきゆう争だ。今度  
こそは、と思っただが、だいいじようぶかな?心配でたま  
らない。でも、もうおそい。ピストルの音が、鳴って  
いた。走った、自分の力をふりしほって、走った。よ  
し、今度こそはと思っただ。その時、心配などはなかつ  
た。そして六周目、テークが見える。すると、後で人  
がいる。ぬかせるまえたと思っただが、ぬかされ二位だ  
った。でも、このときのうれしさは、今もわすれられな  
い。二位でも、自分の力を出し最後まで走ったことが  
とってもうれしかった。

(芹ガ谷小)

わたしの最大のなやみ

六年四組

JA女

今年、六年になって、朝礼の時一番前になった。わ  
たしは、はずかしいやらかなしいやらで、心の中は、  
ごちゃごちゃだった。

母からは、「一番前なの。そんな手じだったの。」

など言われ、とてもしゃくだった。そして、きかい  
体操部へ入ったのは、好きというので入ったが、もう

一つ、せがのびるんじゃないかという希望もあった。

機械体操部へ、入った。だんだんせがのびたような

気がした。そして希望がわいてきた。すると、運動会

で、クラウの発表するということで、やることになっ

た。五人ずつ組になった。そうしたら、わたしは、小

さいから五年といっしょになってしまった。その時、

一人の六年の女の子が、

「英子ちゃん手じだからね。」と言った。その時、と

ってもくやし、なみだがあふれそうになった。でも

父の話を聞くと、父も、六年の時、小さかったそよう  
するとわたしも父に似て、中学になってからのびそ

だ。でも、

「チビ、チビ、チビ、チビ。」と心の中から聞こえて  
くるような気がする。でも「チビ」と言われると、と  
てもくやし、なみだ、

「わたしだってあなたより、大きくなりますよーだ」  
と大きな声で、言いたくなる。

①うれしさ②かなしみ

YA女

わあい。やったぞ。とうとうやったぞ。勝ったんだ。  
いつも算数で私より良い点を取ってるやつ。算数では  
だめだったけれども、国語で勝ってやったんだ。わあ  
い。わあい。手をたたきたくなくなってくる。

とうとうやったんだ。やつ、の鼻の頭をへしおってや  
ることが。算数の時は、いつもえぼっているいやなや  
つ。国語だけじゃない。理科だって社会だってちょっ

びりの差なんだけど勝ってやったんだ。ヤッホー。

とびあがっちゃった。

(芹ガ谷小)

YA女

ぼっかり穴があいてしまった心。

あの人がいなくなっちゃったなんて信じられない。

この世の人じゃなんでも信じられない。

ついこのあいだまで、あんなに元気だったのに。

手をつないで笑いあったのに。

今でも、その笑い声が、ときどき頭の中でこだまする。

あの人と遊んだときのことが次々とうかんてくる。

でももうあの人の笑い声は聞けない。

いっしょに遊ぶこともできなくなってしまった。

ぼっかりあいた心の穴。

だれにも、うめられない穴。  
あの人がいなくなったら。